

校長室より

「天空高き」



第131号



令和2年3月1日

## あなたと私 ー卒業生に贈るー

右にある詩は、皆さんがよく知っている金子みすゞさんの『わたしと小鳥と鈴と』です。

この詩は、鈴と小鳥とわたしがそれぞれの特色の中で存在することの素晴らしさを歌いあげています。

タイトルは、『わたしと小鳥と鈴と』ですが、最後の2行では、「鈴と小鳥と それから私 みんな違って みんないい」となっています。

私とあなた（小鳥と鈴）ではなく、あなたと私になっています。私がいるからあなた（小鳥と鈴）があるのではなく、あなた（小鳥と鈴）がいるから私がある。だから、あなたも私もどちらも大切。そう考えた時、「みんな違って みんないい」という言葉が生まれたのではないかと思います。このように考えると、地球上のすべてのものが、命のあるなしに関わらず、同等の価値を持つ、ということになるのではないのでしょうか。

卒業生の皆さんは、平成の時代で生を受け、令和の時代に活躍する世代です。

令和の令には「よい」とか「素晴らしい」とい意味が込められています。令和の時代を「よい、素晴らしい」ものにするためには、厩戸王（聖徳太子）が制定した17条憲法の第1条に「和を以って貴しと為す」とあるように、大切なことはお互いが仲良くすることだと思います。

あなたがいるから私があります。「みんな違って、みんないい」この言葉を、令和の最初に卒業する皆さんに贈ります。

卒業、誠におめでとうございます。

わたしと小鳥と鈴と  
金子みすゞ

私が両手を広げても  
お空はちっとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように  
地べたを早くは走れない

私が体をゆすっても  
きれいな音は出ないけれど

あの鳴る鈴は私のように  
たくさんな歌は知らないよ

鈴と小鳥と それから私  
みんな違って みんないい

いいことが起きたから笑顔になるのではなく、笑顔だからいいことが起きる

中井 俊已（作家・教育評論家）

## 3月の月間目標

### 一歩、前へ

#### 令和元年度 チャレンジ目標

- 1 挨拶 先に明るく元気に
- 2 先を見据えた行動 5分前行動  
・登下校のマナーに心掛ける
- 3 整理整頓
- 4 1%を誰かのために

「光陰矢の如し」今年度最後の月になりました。

4月からは2年生は、最上級生に、1年生は先輩と呼ばれる学年に進級します。

進級を迎えるにあたり、改めて今年度を振り返ってみて下さい。

「振り返る」。広辞苑では、①背後をふりむく。②過去をかえりみる。回顧する。と、あります。

私たちにとって大切なことは、この一年間（過去の自分）と対話し、来年度（未来の自分）へ、アドバイスをすることです。それは私たち人間にしかできない特権です。

その特権を行使して、未来の自分に向かって一歩、勇気を持って踏み出すことが大事です。

## 人生のピンチはチャンス？—ふたつの魔法の言葉—

小説家の森沢明夫さんが執筆した月刊誌「潮」（平成31年1月号）連載のエッセイ「小さな探検隊」からの紹介です。

・・・そのなかの一人の女子生徒が「ピンチを乗り越えるにはどうしたらいいですか？」と、かなり切実な目をして言いました。聞けば、この女子生徒は、いままさに人生のピンチを迎えているのでした。

ぼくは、ピンチだらけだった自分の過去の経験をもとに、なるべく具体的なアドバイスを授けると同時に、「ピンチを乗り越えたあとの君は、いまの君よりずっと素敵な女性になっちゃうからね。だから、ある意味、今は成長するチャンスだよ」とも伝えました。

彼女は大きな瞳からひとすじの涙を流しながら、うんうん、と頷いてくれました。近い将来、成長したこの娘が背筋を伸ばして、学校の廊下を颯爽と歩く様子が眼に浮かぶようでした。

さて、「ピンチはチャンスである」という考え方は、もはや一般的であると思いますが、せっかくなので、いくつかそういう例を挙げてみたいと思います。

まずは「三河のエジソン」として知られる加藤源重さんのお話。

加藤さんは、個々の障害者に合わせた「自助具」を発明し続けて、日本財団賞、吉



姉妹校 ポールケイン高校  
「図書館」

川英治文化賞などを受賞したご老人なのですが、じつはご自身も障害者です。機械工をしていた五六歳のとき、うっかり右手を機会に吸い込まれ(親指 1 センチを残して)、すべての指を失ってしまったのです。しかし、利き手がほぼ使えなくなった加藤さんは、残った親指の付け根を最大限利用するための「自助具」を自ら発明し、それを左手一本で作りに上げてしまいます。出来上がった自助具のおかげで、加藤さんは右手でモノを掴むことができるようになりました。そして、このとき加藤さんは「発明の喜び」を知り、他の障害者も救おうと思い立つのです。「三河エジソン伝説」の始まりです。

加藤さんとお会いしたとき、ぼくはこう訊きました。

「いまでも、右手の指があったらな、とおもうことがありますか？」

すると加藤さんは、あっさり首を横に振ったのです。

「まったく思いません。指のないこの右手は私の『宝物』ですから。この手が私に、夢も、やる気も、喜びも与えてくれましたし、この手のおかげで、多くの人々に『ありがとう』と言ってもらえるような人生になったんです」

まだ指があった頃の加藤さんは、まるで生き甲斐が感じられなくて、自分の人生に愚痴ばかり言っていたそうです。つまり、加藤さんにとっては、右手の指を失うという強烈なピンチこそが、まさに人生を変えるチャンスとなったわけです。

平成三年に日本を襲った台風 19 号は、青森県の農家に打撃を与えました。強風で収穫直前のリンゴがほとんど落ちてしまったのです。多くの農家が肩を落としているなか、ある農家だけは、このピンチに逆転の発想を持ち込みました。なんと、落ちなかった少量のリンゴを「落ちない縁起物」として受験生に売り出し、大ヒットさせたのです。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

元サッカー日本代表で、いまでも Jリーグの川崎フロンターレで活躍している中村憲剛選手は、子どもの頃、クラスでいちばん身体が小さいうえに、足も遅かったそうです。しかし、中村選手は当時を振り返りながらこう言います。

「あの頃、チビで鈍足だったからこそ、正確なトラップと、パスの技術を磨いたんです。プロになったいま、そのふたつが最大の武器になっています」

中村憲剛選手といえば、トラップとスルーパスの天才と言われ、日本代表としても活躍しましたからね。

あ、そうそう。ピンチや欠点こそが成功のもとになる、といえは——、ぼくは講演会でよくふたつの「魔法の言葉」を紹介しています。それは、「だからこそ」と「それでも」です。ピンチになったり欠点が露呈したときに、「だからこそ」「それでも」と心の中で唱えると、あら不思議——、続く言葉が必ずポジティブなものになるんです。で、その続く言葉を行動に移せば、自然と未来が開けてくるんですよ。

たとえば、サッカー選手なのにチビで鈍足「だからこそ」トラップとパスの技術を磨こう。あるいは、右手の指をすべて失ってしまった。「それでも」自分にやれることがある。などなど。

ふたつの「魔法の言葉」は、とても効果的ですので、人生のピンチ——、つまり、成長のチャンスに、どうぞご利用ください。

卒業生の皆さんもこれからの人生、「七転び八起き」です。皆さんが人生のピンチに立った時、「だからこそ」「それでも」という魔法の言葉を思い出してください。ピンチを成長のチャンスと捉え、今を、前向きに、全力で、生きてください。

## 災害はいつ、どこで、だれに？－ハザードマップ－

付属中の廊下に、ハザードマップが掲示されています。

洪水・土砂災害・地震・津波・高潮が発生した時、どこに避難したらよいか、わかりやすく図で示されています。教室前の廊下にあることで、避難場所がいつも目に触れ、自然に我々の脳にインプットされていきます。皆さんの家庭でも、災害が起きた時にどこに避難すればよいか、家族がいつも目に触れやすい場所に掲示してください。そして、家族間の連絡方法はメールなのか携帯電話番号なのかもお互いにメモしておくことが大切です。

災害は、いつ、どこで、だれに起こるかは予知することができませんから。自分の命は自分で守る！これを、最優先にして行動してください。



## 大切なことは……

長島 宗深 妙善寺住職(臨済宗妙心寺派)がある雑誌でこう述べられていました。

「仏教は2500年の間にたくさんの教えができました。でも大切なことは『私の口で悪口を言わない。私の頭で悪いことを考えない。私の身体で悪いことをしない』この三つだけです。大切なのは、人にやさしくすることです」

大切なことは人にやさしくすること。私たちが小さな時から、親や先生、地域の方々から教えられてきたことですが、あらためて大事にしたい言葉です。

### 24節気

**啓蟄**(けいちつ) 3月6日頃(2020年は3月5日)。啓は「ひらく」、蟄(ちつ)は「土中で冬ごもりしている虫」の意味で、大地が暖まり冬眠していた虫が、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃です。菰(こも)はずしを啓蟄の恒例行事にしているところが多いです。まだまだ寒い季節ではありますが、一雨ごとに気温が上がり、日差しも徐々に暖かくなってきます。春雷がひととき大きくなりやすい時季でもあります。八百屋さんの店先に山菜が並び始めます。旬の食材で春の訪れを味わいましょう。

**春分**(しゅんぶん) 3月21日頃(2020年は3月20日)。太陽が真東から昇って真西に沈み、昼と夜の長さがほぼ同じになります。この日から夏至まで昼がだんだん長くなり、夜が短くなります。ヨーロッパなどでは、春分をもって春の始まりとしています。雷が稲光り雷声が轟き始める時季でもあります。

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があるように、寒さは和らぎ過ぎやすい季節になります。桜の開花情報が聞かれるのもこの頃からです。